



十燕
種石
葛飾記

四輯

九
上

イロ
679
41



679
41

燕石十種第四輯卷九

江戸書僮

活東子輯

葛飾記 上卷

自序



德不孤必有鄰矣隣者那佐所我有以及諸百邦之基也
 大學曰未則本兮雖然若車祖考父兄容易以未難為本
 者有之點々滴々而以直躬可謂故君子勉其本云是其
 本不亂而未治之謂也嗚呼今此書也下總州葛飾郡中
 數舊迹以雖難成一編幸江戸砂子之餘韻余當繩弗可
 弁之矣凡居此葛府不容易蓋本朝東方為最初日本為
 管領人支為首頸豈斯不難乎是故纂集之未前先得此
 書自是則得新編鎌倉志先以中川喜雲之鎌倉物語類
 歟依以著葛飾記云

時
寛延二己巳年仲夏日

葛飾記

目録

- 一 葛飾の郡 附り葛上邊の事
并去心此子
- 一 葛飾浦 附八系持哥
- 一 弘法寺 并編覽亭
- 一 積石
- 一 兒系宮 附和歌
- 一 鈴木院 附鈴木近に石塔
- 一 香櫻
- 一 八幡宮 附八幡ノ不知森
- 一 高石大明神 附深町の権現
- 一 子の神比社
- 一 法蔵寺 附法願伊豆も及の事

- 一 利根川 附り夜道邊に事
并松花源の事
- 一 總寧寺 附國府基古戰場
- 一 國分寺 附之下陣家迹
并國分の概源
和歌
- 一 継橋
- 一 真間池井 龜井古云附和歌
并今も兒系宮の事
- 一 妙見菩薩 附曾谷及の事
并昔王公廟記
- 一 嘯水 附墨洗橋
- 一 甲下の宮 附鈴鹿山の事
- 一 安房須大明神
- 一 中心 附後銀杏
- 一 葛飾大明神 附葛の井
并古伝屋鏡師

勝間田の池 附和歌

富士波間 附駿河國不二の説
并秘書量監の事

石芋 附片葉芋

天麻子 附田系友の事

清水ヶ系

清續寺

撰乃松 附旧陵の沙汰

瀧比不動

秋葉三尺坊

三千町

圖魔鬼王

心一位香取宮

大明神心

古刀洗水 附古の宰の支

阿取防大明神 附和歌

東照宮北社

夕日皇大神宮 附略録記

慈雲寺

沖心大明神 附十徳圃
三宮の事

村上の釋迦 附略録記

鏡乃沖影 是より行徳領の事

神明宮 附伊勢を神宮の事

辨戈天

行徳北所觀音三十三所名并
道歌

葛飾記

葛飾乃郡 附多蓋橋の事
并志志心此事

名所從當部而至千葉部并依倉順

江戸砂子に菊岡 かつ 一の郡利根川より西に姓古を武藏の内之中古より中絶
さう瓜今姓古より返り成るふ今形を武蔵郡也遠國を京郡より荒川利根川
の取遠くさうと記をむらあるるきんとも勝麻の郡より徳國の府之丈九
地理の象以云俗に下井 利根川の
流るる 乃東南を流るいひて一國の府とするに是れ
地幅狭く河思と海遠と野原田 又徳の中も地切地
遠き八十町不足北郊野山林のさう 熟田也
いふ郡刻の始兩國の境を利根川の流原官といふとも下井川を葛飾の
府此中よりさうと記さるる 是より 垂仁天皇の御宇又敏達天皇の御宇
分ち給ふ元トハ三十三ヶ國也 但し人王十三代敏達天皇より也
とあり垂仁王代地溝を用き農を勧ムト有り是其始なり 敏達天皇
利根川の鹿嶋香取此より洗心背き給ふと記さるる 是より 取遠くといふは
の沙汰あり 是より 史より前より國を城その國郡の帳面より出ても一
國郡を記をむら取書の取遠くを以國郡賦税の大切帳面を而して後

出づるもや一説ふり総督降の府を元ト首西斗りや 他ト首東より西ト首
北東首乃西と東と對しそ首西と鳴ヶ行徳順の姓古の海水の于原麻のこ
人家次井と殖て般系昌の地と成りし総の首降の府中と鳴そ首西の
みして今ふ馬市場の町をの跡をと残るりとうや然るに角田川を兩國の
境ふ紛となきしう又子任より徳谷と列邊の大堤の荒川を境らせ封爵
那し給へ麻治香取の封國の堤と是るえ又京都首野郡も首野の郡と
し事之故は鹿治香取の民に當て鬼國と名る鬼門をまて鹿治香取
續く府城の依て是を表し給へん也又同く郡名國を隣りて他國中も有
よしをよりむさる事あれども地理の廣狭ふり府城もさる成り
色し是他は異なりならんか意ハ天照を神より麻治香取を賞し
給ひてし総の府の中を川を畔し給へ神を坂東を弟より比し給ひて
然るもとも素盞爲尊をとり奉る所の戦利を以て或ハ武藏も用なる
色し依りて多し古定観ふ依り給へ新法ハ民を害るといふ語有り

但し有用にして其時代の茲民乃降ふ用も可也又中國より順の
能きの氣之如何あり業平の時代法和乃前ハ大所の是ハ取遠ひて
なるに首西といふ所を知りて首降の府北中の西と云事之成るに平橋
郡の西ハ平西といふ所ハ長尾國首降郡あるに首西の西と對りて
及次則別也又元ト首西ハ首降の本府ありし縁田と云るハ馬市場のま
つら跡有と云そ時代以徳のまつら原の新地也府と云にまつら原ハ首西
よりの取立テ新田場縁有と云又東艦の依りて然るに業介常凱父子
相與しそし総の國府ふ余舎と云有るに馬府の是也市川の宿を本府と
いふもなるしそと業平自らり見せし給ひしなり依てあつし
と中法は北中ハ角田川といふと相傳ふりける事疑ひありあるの款
物も勝原ハし徳國首降乃郡ありかの川しそ此郡の中ハ大河あり
ぬる方といふ川乃為以て首西の郡といふこと有り 法補是幸乃昔の
大船の是ハ場原左首西と云に其時代是れしし総も用ふる也元孫

の以て一ヶ年に三艘宛親舟の大船河尻より入り来るものと現見の
里老傳る昔時降の府は今以徳性古の江戸性還の舟昔西の川は不通
路とて但し御當代に改り新川を掘り其の舟も昔の舟も新傳る
る舟舟の舟常別船子と下野列述方奥列中総ては強くは塩を介大船
の賣買の傍津也 但し鎌倉後船の舟も

後父左衛門守忠下子に思ふ行半昔西、
三那清室等の舟も皆是より入津也 但し塩濱も塩濱
少く押切村より

とハ皆塩、
今村名と改る 寛永年中寺社地方改メ大川尻より入るとハ弓と弦

布と通、
入江の舟は強く押切村傍村の舟海と云は人の境海より川へ入れば富よりハ

不の字ナと云大船又鎌倉性舟の舟の通路乃地蔵寺を惜みて世世他人
よあ送せしむと云は新の舟なりと云石佛有諸と祈念されハ流以風小

乃病速く除く也其介塩濱乃塩濱乃塩濱不宣不宣と云は是有り

いづの世より河築苗今皆塩濱と改る 但築苗を
寛永年中 越る初徳と云有る事

本行徳金剛院の用は行人とて改る是も右の如く昔の大船の地有る事を

惜とての舟者ありと云 但今ハ寺なり 然して法國の舟船此賣

買不ハ大河より大川尻よりハ不の舟と云 但今ハ二俣村に候 又大昔は以徳順

の内堀江村を大船の場といふと若干の町割船所着店ありと云 但今ハ二俣村に候

その代ハ昔西長嶋といふ所と地續きと云 但今ハ二俣村に候 昔長嶋及と云 但今ハ二俣村に候

隣より一梵音寺といふ親音の伽藍海の寺あり 但今ハ二俣村に候 坂東の礼不有るを

夜ハ昔傳ありと親音の作られしより 但今ハ二俣村に候 漢の舟船ナと改り十三番と改りし

より張ふといは改りし 但今ハ二俣村に候 愚按ききき 但今ハ二俣村に候 昔傳の傍の時辰己の舟當代堀村の耕

地より大船入る船はけ不の各相之海ありと白鳥も納有る 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

時代國府臺の傍に昔よりを以堀江村河尻堂と云 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

堀割水を通る舟を左記の方此海河皆田地と云 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

も海より川へ堀割り大船又鎌倉性舟の舟も 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

通路 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

た 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

舟 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

舟 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

舟 但今ハ二俣村に候 舟の舟道權の

先ある事を知る今も其列の舟乃ら虎より但し上下野列奥列常列下流を
入る舟をみれば舟を絶てをわたり入る事あり
大高の方面の勝を以て徳の内は能く回を捲く連く大船を以て
也と云ふ願舟の勝の用方を其長短の深自然と表徴するなり
此節を定観の古田氏堂先を掘刻り水を落せしむ既將軍の勝と
減る事と以て鎌倉へ入る古田氏の殺法を多り可惜と可謂將軍の
地ふ不初と東の青龍の香取親子の流水有り北は玄衣の落法は有
西は白虎の東海道有り南は朱雀の田野浮時漸くたる海原の
若し其法則則相七本可推之相然い上り方圓東は不勝る能く更中修國首
風風極景ナリト至聖金集集見
岸の中大河は然るべく舊記に云くあるん能く更初めの改近を
子視の事しと云ふは其の極に或は都氏好む事之近事近は其
大船の甚あり残りる事今は只鄙と誤りか川こそ其声の
ゆる之を井川の火船も皆の府も其事なれば其機は是て般系田
成るの威は順一道理之是法氏乃心なり

綱鑑本全五十四先是治平中邵雍與客散步天津橋上在河南府西南
架洛水上聞杜鵑聲一慘然不樂客問其故雍曰洛陽舊無杜
鵑今始至天下將治地氣自北而南將亂自南北今南方
地氣至矣禽鳥飛類得氣之先者不三年上用南十作
相多引南人一專務變更天下自此多事也至是雍言
果驗云

邵雍字堯夫康節ト溢米世人也邵ト云所在左邵先生下
云梅花心事易作者數道籌術之祖也
是陰陽逆ト順トの細あり玄白虎より青龍朱雀より
去上ハ悪ト是より洛居て東南郊ハ不ハ其の氣を
舊觀より背きわつて慶安年中の國附を見らば武元國サを都
あり是法和より其の旧規の如く形なる一衣其法より用事

源家出仕の後事を將々戦懐のたをを東鑑より西の源家の
武蔵の河と云ふ友好なるを——こころは正理小非なる——旦王城の
定式より負けたぬり秋枕秋の寐免然國名不記中も皆角田川國名
里唐邊より録必名所を載を今更に云ふ不及事之改めん事古語
を及俚俗の卑流不換ルリ——又同書業平天神を菅神也と云ふ
旭債業平東より事伊勢也諸の龜儀より——奇道の傳あり——
云り業平より流し——この虚成といふ事想して始終極めはるる
のよりや然るに流しあり流しあり——流しあり——流しあり——流しあり——
す位濃形より流しあり流しあり——流しあり——流しあり——流しあり——
遠く——見え見え——思ひやりて流し——流し——流し——流し——
りの雲の——人の流あり——虚なる——虚なる——虚なる——
習ひ見ぬ里をも思ひやり又人々の流あり其の流く流く流く流く
をたまの配流の人とはいせんず又古語より入流流ありすといふ事

武藏國の之を此の事をもたまの流く——此を京寺は和國なる建元後
帰俗も知る免角りり流し——とて極りきる角田川より流ぬる——
隅田川を事——中川より流し——今この金龍の侍乳の
彼地へ摸されき——奇枕秋の寐免然國名不記中も皆角田川國名
ふ國府基の円子居の事——をたまの流く——是れ京物も載をるる
お流を風心りかひおも有る条基法師はまた心々こえりく唐邊の
角田川ありをりかひおも有る条基法師はまた心々こえりく唐邊の
發掘りまの河を流すの心も是れも各所不載をるるを載をるる
てある國府基を——用ゆる——是れ京物も載をるるを載をるる
あり織得るるを金龍の——流しあり——流しあり——流しあり——
幸意をまの流しあり南の海邊の昔に入海也よおけき流しあり今皆
田地と改り流し入りの流の事皆所の字なりと改り云流しあり字大例
立野 入りの流を改り 芦畔 是も同じく改り 新地 是も同じく改り 有の外流しあり不邊大抵妙

いもの代より新田と成り事を不知但し堂光の堀割の跡。地形海平深より田低く、
見ゆ所より又れをいおとしは國府葛北赤岩の氷路をいをまの
ふの船入氷き一それ淺少程とて右今れ市川村の道ありんは新ひむ
大船の入津の場ありて右は其淺といふ入ぬと川とよと大船勝の少きり
是き一と見えあり

又同書より各書あがり湯室の葛と斗り是も換一と上列各書郡が切之
りつは市と云市立り尊東を見給ふ事印井津之橋入水相別より
上徳の海といは葛浦浦の遠ひあり一右を平紀も見たり水川明神の
由來をい云
尤日本武尊妻意一海を見ゆり給ふ事妻意の橋荷をいふの事
一右左も右を事なれ大久とい海の方を恨め一帽くせあり
あらん又地理係をいハ彼海に右左を見給ふといふかかりぬ道
を意ん給ふ右日を経り上列よりいひて右程思ひ増りて一道理也依て
上列の各書を用かて可也是も是奥列のうつ一をり信まか思ふは秋の

宿屋見武蔵といふ一誰為と恐ふの心なりつひ煙ハ絶てす見え海邊
彼は是も奥列の思ふ心の奇をきりハ絶えすはて旅の神を用よかあり
そしをさ来たと取つて枕詞之右秋の志のぬれ軍の氣色之奥海道と見え
より等類之是めの事その換一と云に準一して記す

又隅田川一説曰武州岩槻領と新武蔵新方領との間名有是其
下也ト云り兎の宮積池ありて右今のは母寺に移一と云り
編ノ曰右の新奥別海なる人商人奥へりてといは鎌倉は所
角田河の根元なる人今この橋場の派ハ奥海道とて
あつた常陸中條の道筋之又業平此都をの秋ハ鷗ありハ
はる海を述る所ありてハ栖さる右業平の時代ハ今この母
寺ハ換一多しを是依る事を記す

上野國利根川利根川の末流右云葛飾郡とありて右の川といふ

利根川 附より夜道邊の事
并枕詞源の事

京物河井の柳嶋を又と井川とも毎巻川ともいふ高野の岩下を
 かしき川と云み屋よ 信小坂東古希といふ
 名物 世系鯉 黒目鮎 鱸 鱧己上松地固 鱧の思 細子パヒッ
 近年ハ鯉臭出来 昔西世系海苔近年ハすくや 寛保二壬戌年 昔ハ河之
 或人夜道遠にゆく 投網をあらく 鯉鮎を懸とせしむる 或夜
 又ゆく夜更頻りふゆり 自由をやらせらん 意き漕房 我らかよ
 帰る しばし人色青らぬ 氣色かきく見らん 六ろの女房 酒杯の
 並く有しを認めらん 酒の赤色も明く 只是見送くと有り 以
 何れそ見せけれハ懐の中腹をどろろとあつりと 大あつと蛇と巻服巻
 改を胸くち 尾をぬきたく かくとまらるる 女房左のめ風を
 もて那 鉄砲鉄砲以能付 奉書を以て蛇の首を裏に履らるる かく
 けの 解て皮肉骨腸はさく かくもくもく 此も人よ何者の一念の附傍を
 かく蛇とぬき 身をばはき 纏ひしり いと怖しき事なり 侍り

又ハ川上ハ松戸の海りも國府基より一里路と云是より又二里程ハ大谷口の
 城跡も小金領の内也 則城跡今種村東漸寺の境内の隣にハ城之多賀谷多賀谷ハ松列ハ谷攻の
 勢の角より東麓ハ見ゆ 大坂秀頼合戦の侍代武臣のハ幕下して戦功あり 由是後
 江戸にゆきてハ府の滝兼てのハ約を大兵礼介但ハ幕下ハ 而侍ハ城を則て
 家老ハ出奔しと見之と家老服林氏何果別尋事とて封侯を頼りてハ
 原地をハ新田ノ領ハ子速路りて 是を二ツ本村と云彼先祖林氏
 の林の字ハ本二ツ並くと云 名付しと云 穀番蓮寺と云 禪寺ハ紀立し
 系圖猪帳面衣具並皆納め 又黄金何枚 朱河而探埋み有り 由是所記する
 と家臣の子孫ハ物語之抄に古名より古主人の名をもとくしと云 兼くハ但
 主人ハ江戸府と云 後ハ旗本一騎ハ成りて 今ハ今鯉魚のうと云 右
 二本村七八百石の村のう 敗北の殘勢又その内を撰て 彼林氏據りて 一村の百姓
 といふ 由是一族といふ也 或ハ林氏ハ唐林和靖の末裔のう 砂子ハ書り二
 本村も林氏ハ元トありんとも云 然レハ林氏ハ大坂合戦して 首八十二級ハ首帳

面も穀香蓮寺に絶有之由多人の絶の高六九百六了石ふと羨る有之幸抄
有之存也と事たり

陶淵明の桃花源記曰晋太元中武陵人捕魚爲業爲緑溪行忘路之
遠近忽逢桃華林夾岸數百步中無雜樹芳艸鮮美落英續紛
漁人甚異之復前行欲窮其其林盡水源得一山山有小口
髣髴若有光便捨船從口入初極狹纔通人復行數十步豁然開朗土地平曠屋舍儼然有良田美地桑竹之屬阡陌交通雞犬相聞其中往來種作男女衣着悉如外人策髮垂髻並怡然自樂見漁人大驚問所從來具答之便邀還家爲設酒殺鷄作食村中聞有此人咸來問訊自云先世避秦亂率妻子邑人來此絕境不復出遂與外人間隔問今是何世乃不知有漢無論魏晉此人二爲具言聞皆歎惋餘人各復延至其家皆出酒食停數日辭去既出得其船便據向路處之誌之

及郡詣太守即遣人隨往尋向所誌遂迷不復得路云云

私説云漢人道々思業多り恩を顧て桃花源に至るは其地ハ
喻へり口此の溪洞の村里の類之谷合の道羊腸少く隘田を多
所と若く墟間乃地不ふるとの之誌と有之矣之を括る之數
船の魚を購て記さん爲之びり舟客く自多魚を乞ひ桃花源
ゆりしなるを又之類之

則桃花源此詩曰

讀秦記

海上空求五色芝
桃源自有長生路

鮑魚風起竟堪悲
却是秦皇不得知

海上空求五色芝といは徐福が不老不死の薬を求めんとて吉里男州
女を誘ひ吉里より富士に入り口を止りし事なりと後海
とんとし始りて遂事と又口を秦皇といは皆右徐福の子孫之

則後秦の川勝京都破滅の太秦ウツキを建立と云々後々太秦と書又
 秦の國の人倣る氏とする云々を忘る心之弟二句の始皇は亦不
 時易の金書して其真を破るの鮑魚を破せし事之中三句の始皇遠
 きを求るの非之桃源は自ら長生乃治るを以て知る云々之叔朝人皇
 七代者靈帝六丙子年秦昭王西始皇の祖父の親也は時東周周西代
 棟咽三十七代赧王三十丙子年日かと同歳申す徐福創け年不
 二の二入る然六始皇は曾祖父の侍徐福未朝を去るの始皇遠
 後海せん事とを念してたる之日域の三島の中蓬萊洞不二人
 日中九列方丈の琉球を可尋又始皇徐福多混雜して是る
 左云の記旭漢楚軍終也ハ又萬國島に依て見ると海中のみ
 有り岱嶼神の島負嶠巽の方方壘琉球瀛洲乾の方蓬萊
北方日本 以てよ尚る云々
西國以東

龍

紀納言

夜雨偷濕曾波眼新嬌 曉風緩吹不言唇先咲
 綺の如く右書に枕花林の小は想像多き之も彼は葉書也
 心の傍ら峻きを云々和漢一體の化之又枕花林の龍門心の龍の系
 上也其源は崑崙は瑶池より水出て大秦國に灑而竜門の愛
 之禹門津門龍門とて三門の月も也禹門は夏乃禹王の侍蜀の
 巴水とて一切層は之龍門とせよは血ナヨク下は鯉魚三十年を経て登
 り得て枕花の水は吞て龍の化と云是なり龍門原の述懐詩白

白居易

遺文三十軸軸々金玉聲 龍門原上土骨埋不埋名
 水源一山崑崙より續て流る竜門の下の小秦國咸陽城建つ二里ふ象て後
 道を蜀山に續るもけ所之感陽城賊を記く一炬乃灰燼と云は是より始皇
 の法に詩書を破く人よ對する者は皆刑戮を則ち斯家書を改め蒙
 の文字を造り詩書百家は語を悉く焚き盡生を初め儒者

四百六十人皆坑すトと多生ト而ト多ト儒を坑ふト事阿
房宮を建屋わト事人涉ト坑ト後阿房宮
滅ト其血ト是存の樹林ト此山をト不腐ト針黹ト通ト
杜律の經の漢の陵の人
トリ金の阿房宮の陵の人 其石二世皇帝をト劉項並ト趙高
是を殺ト後ト漢の世ト成ト彼樹林洞中ト此坑ト皆是事成ト遺書
せト人ト成ト一ト盤ト菜ト筆ト等ト書ト咸ト于ト今ト於ト人ト恩トをト義
るト夏ト樹ト原トをト取ト下トとト事ト人ト是ト也トとト事ト人ト也ト余ト性ト事トの
上ト春ト夢トらト皆ト朝鮮ト人トのト衣ト裳トをトとト人ト憾ト成トをト人ト之ト據ト人
亦ト此ト勝トりトのト多トりトのト據ト人ト事トをトとト事ト人ト也ト目ト物ト也ト
皆ト衣ト裳トのト花ト之ト種トのト類トをトとト事ト人ト也ト周ト章ト翔ト以ト事ト之ト猶ト有
てト是ト也ト余ト以ト夜ト錦ト繡トのト詩トをトとト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向
居トるト夜ト之ト夢ト後ト初トをト知トぬト秦ト坑ト事トをトとト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向
切ト用ト也ト城トとト成ト一ト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向

をもト也トのト多トりトとト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向
左ト情トをトとト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向
羽ト之ト秦トをト攻トめト内トのト事ト人ト也ト今トのト坑トにト此トをト若ト也ト一ト山ト向
別ト長ト陵ト詩ト曰ト

長陵

長陵高閣此安劉

豊上舊居無故里

耳聞英主提三尺

千載豎儒乘瘦馬

附葬晶系々盡列侯

沛中原廟對荒丘

眼見愚民盜一杯

渭城斜日重回頭

高祖の西楚より前漢一代目之長安城の都を三尺の劔を以て四百餘列を以て
銘を龍泉と云張良韓信を以て下之有は永くト其れを周みふ是れ其れ
ぬ又利根川の月を其のゆと云ふと云ふは劉を其の介深りトを其れ保年中別
河を掘り水筋を其れ流を其れ下と云ふと云ふは劉にも成る之若は劉も其れ下

落方て今よと幸なりとそりひ鐘をひらけと首を藤原村東寺の
鐘を天下の物産なりと川の端ありと田首を市清時の七那時堂のきも三那
清堂の子也東鑑
祈願所と云ふ寺とありそ近不より有る言ふと舊卜のちたハ欠入と云
む國の思り吾妻、明神の社より是も檜原の神ありと云ふ一信も右國深し
時ハ水牛栖よりそそり怪異の事ありと云ふ

歳夜もふりたの川をいり人を又と返りて夜は返らん

首飾浦 又ま同北入に衣袖作る浦とも

安房上依り銀衣衣る口國の入合い浦之西々伊豆相換の浦く續く則富子の
高徒年ゆく実元とてそ若波を覆屋屋屋東不子の船波比京田子の浦も
も減らゆと云ふ

京物

松原

赤藤帆舟

沖津洲

貝斗り考まら洲

名物

石之階魚 カレイ 他他國

物又尻 他國

洲芸皿 同

鯨鯢上 京都九家
年春上都

郡成レ市ヲ常ハる一を後又
舟橋方と云

海麻上 稀之

亀出 大龜あり

沙目入上 鯨小似あり
但一稀之

右之介数魚多し一略す

両口蛇出 里内

芭蕉乃花咲

五三夜に及ア當郡國分寺も咲く是を
日本の優墨草と云ふ由

淺村竜神辨賊天く龍燈夜くと

皆祥又他今人形

續千載集秋十

若右之信教智為成

墨りなり龍とかりひむう一見しゆれ入りの秋乃夜の月
不知集奇枕大名書

源 俊頼朝臣
からしれまの浦に仲津洲ふあけの北を舟かろれをそり

同集

ねね

猪鹿のいさ同れおらたれとそり流を多ゆれとそりぬ溪の
又入りの東に吾れを舟橋の沖ふ遠く渡るといふ深き渡有り信ふ谷と國と
云ふき渡り較をわては處ハ昔相馬の將門の妻核榎のちれ入水せと云

前之依く言傳ふ波難負と栲樵此の初の魂是こと其は栲樵此の初の
容顔世に霽しきして田原友を秀郷の婦をを秀郷を以て將門に
送るに女とありてはしきと將門の人の進習をうけて常の傍らに離れぬ
其の中より居る魂を不常ふ七人其也その事を知りて依て栲樵の事
相傳ふ向ひ紫氣著きて其の事とあるにしき融をより入るにや將門城に
て流るる都へは建もゆぬ其の船橋を不縁の事とてか時々危きといは
は漢猶瓜見ん事ををいひ出て世遠く渡る身を投ぎ定しき此の事
其の事魂をりて大敵難とあり栲樵は渡る身を投ぎ定しき此の事
を不縁の事とあり不縁の事船橋天麻の事後ふ出す又漢に
洲蓋と云物ふ表しき栲樵の故居り有るも右は是之依て佐國よりの事
不兼す當國相馬郡此の栲樵の花咲ても実をうけしき又此の事
相の事とあり此の事相馬郡の月の栲樵をりて此の事栲樵の事此の事
前を年記の事見ん此の事此の事此の事此の事此の事此の事此の事

よみ人あつらん

浪風をまら入の塩をりて身をまらすおれら此の事

八景

鹿野山晴嵐

長江陰蔚暗飄颻

莫怪漁翁去又漂

鹿野山嵐雲奮發

雲齋浸碧浪作平潮

まんとは嵐を頂ナや吹石のとふかののみ心此の事

曲江秋月

洞庭薄暮葛江灣

乘月猶歌一釣竿

今夜無眠鹽竈裏

風颯玉浪接空山

わつら入の里れ多しおし月も今を月とゆら乃つこ

遠岸夕照

夕日殘陽波色紅

徙依遠岸暗汀蓬

西山返照一時景

獨賭飾濱還晚空

こを破り入口を暫く中々くく詠めもすまの波乃月か

鹽濱落雁

一行落雁兩三行

漠々平沙倚境塘

人迹飛鳴繒繳外

啣蘆又下塞鹽場

去はさう袖を法をたふた村ありとありとこれむれりらん

浦船歸帆

颿々葛浦長雲昏

一葉扁舟泛浪翻

幾許風帆歸去速

陰收處々映斜暉

舟人そのゆかりたを多く浪をたむ仲波わけるは浦風

富士高暮雪

士峯白雪元暉々

清見摸以前遠浦隈

好顧金雲西日影

神仙景絶海東魁

幾ささそを致くそ多は程ゆのるもそるふさ川をえき連

猫小寝夜雨

葛郡孤村臨海岸

夜苦漁火寂寥歸

濤荒溟暗屢雲流

投掉瀟湘懷曲磯

雨はれ海かたけりし破きまらよるは舟かけ志りぬるとと

中山晚鐘

貞間曲渚股肱景

輔羽異江村緝園嶠

日暮正中山寺鐘

旅行進歩知多少

う路くのり入にのるくも寺にのりあへはるもるれり

東鑑卷十七 建仁元年辛酉八月十日戊子甚雨午尅大風郷里穿屋江浦

覆船竊カ岳宮寺廻廊八足門已下所々佛閣塔廟顛倒凡九万家一

宇無全所云云下総國葛西郡海邊潮牽人屋十餘人漂没

不云同廿三日庚子甚雨大風如去十一日依兩度暴風於國土損

亡^レ五穀^ヲ於^ニ庫^ニ倉^ニ不^レ納^ニ一物^ヲ云^ク

同八丁初

首^ノ尾^ノの形^ノ乃^ハ海^ノ邊^ニと^モる^ル乃^ハ陸^ノ内^ノの^ノ形^ノを^レ見^ルべ^シし^レ河^ノを^レ隔^テて
首^ノ尾^ノの形^ノ此^ノ附^ノ用^ノ名^ノ地^ノと^モ見^ルべ^シし^レ地^ノ格^ノを^レ見^ルべ^シし^レ今^ハ此^ノ地^ノ形^ノ解^レ釋^ス
人^ノ形^ノも^レさ^レり^しり^し河^ノを^レ隔^テて^レ今^ハ此^ノ地^ノ形^ノ解^レ釋^ス
さ^レり^しり^し

總寧寺 附タリ國府是古歌場 寺願

中^ノ河^ノ市^ノ川^ノ村^ノより根^ノ切^ノ橋^ノ以^テ越^テ根^ノ切^ノ村^ノを^レ過^テて^レ河^ノを^レ隔^テて^レ以^テ法^ノ也^ノ中^ノ
も^レ亦^レ以^テ之^ヲ禪^ノ曹^ノ洞^ノ宗^ノの^ノ府^ノに^テ寺^ノ乃^ハ切^ノ寺^ノ此^ノ司^ノの^ノと^モ國^ノ東^ノ三^ノの^ノ僧^ノ孫^ノの^ノ
と^モ也^ノ安^ノ國^ノ心^ノ總^ノ寧^ノ寺^ノト^モ號^スす^レ開^ノ心^ノ通^ノ幻^ノ和^ノ尚^ノを^レ之^レ此^ノ僧^ノ孫^ノの^ノ司^ノハ^レ歌^ノ花^ノ國^ノ
永^ノ平^ノ寺^ノあり^ニ之^レ乃^ハ僧^ノ孫^ノを^レ支^レ配^スと^モ之^レ此^ノ僧^ノ孫^ノハ^レ中^ノ總^ノ寧^ノ寺^ノ乃^ハ總^ノ寧^ノ寺^ノ
寺^ノ常^ノ法^ノ也^ノ田^ノ大^ノ中^ノ寺^ノ衣^ノ孫^ノ國^ノ生^ノ誠^ノ純^ノ徳^ノ寺^ノ也^ノ 江府ニテ寺ハ愛宕下ノ青松寺橋場、
總泉寺高輪ノ泉寺也助込ノ吉
祥寺ヲ入テ四ヶ寺ナリ何レモ洞家但レ
吉祥寺ハ總寧寺同位司サノ由 尤^モ總^ノ寧^ノ寺^ノと^モ同^ク京^ノ師^ノの^ノ道^ノ

心^ノ庵^ノの^ノ解^ノ毒^ノ丸^ノを^レ出^スと^モ之^レ當^ノ寺^ノも^レ舊^ノト^モ國^ノ西^ノを^レ以^テ國^ノと^モり^しを^レ天^ノ心^ノ年^ノ中^ノ尚^ノ
亦^ノの^ノ小^ノ糸^ノ氏^ノ政^ノ高^ノ小^ノの^ノ國^ノ宿^ノ遷^ノす^レ後^ノ又^ノ友^ノも^レ實^ノ文^ノ年^ノ中^ノ國^ノ宿^ノを^レ世^ノ法^ノ府^ノ意^ノ
移^レと^モ之^レ 但^レ大水^ノを^レ道^ノり^しぬ^レと^モ也^ノ歌^ノ場^ノの^ノ 是^レ絶^ノ境^ノの^ノ 靜^ノ澄^ノ清^ノ淨^ノの^ノ禪^ノ林^ノ也^ノ
其^ノ魏^ノを^レ亦^レ省^ノシ^レウ^レル^レナ^レル^レと^モ 是^レ絶^ノ境^ノの^ノ 靜^ノ澄^ノ清^ノ淨^ノの^ノ禪^ノ林^ノ也^ノ
初^ノより江^ノ上^ノ野^ノ中^ノ堂^ノを^レ見^ルべ^シし^レ是^レ乃^ハ幸^ノ名^ノを^レ朽^レス^レ身^ノを^レ赤^ノ也^ノ
や^レく^レ見^ルべ^シし^レ別^ノハ^レ自^ノら^ノ身^ノを^レ危^レす^レと^モ是^レ乃^ハ瓜^ノ也^ノ 他^ノノ^ノ少^ノ震^ノ旦^ノの^ノ天^ノ心^ノの^ノ赤^ノ城^ノと^モ
の^ノ右^ノ橋^ノ乃^ハ又^ノ面^ノも^レか^レく^レと^モ是^レ乃^ハ熱^ノ門^ノより入^レ不^レ化^ノ客^ノ有^レり^し山^ノ門^ノの^ノ右^ノを^レ鐘^ノ樓^ノ
九^ノの^ノ鼓^ノ樓^ノ隆^ノ政^ノ停^ノと^モり^し乃^ハ四^ノ廊^ノより左^ノ禪^ノ堂^ノ右^ノ法^ノ堂^ノの^ノ法^ノ堂^ノの^ノ佛^ノ殿^ノ之^レ
何^レも^レ厚^ノき^レ也^ノ是^レ乃^ハ三^ノ堂^ノと^モり^し大^ノ門^ノの^ノ内^ノを^レ田^ノ道^ノ備^ノと^モり^し極^ノの^ノ樓^ノと^モり

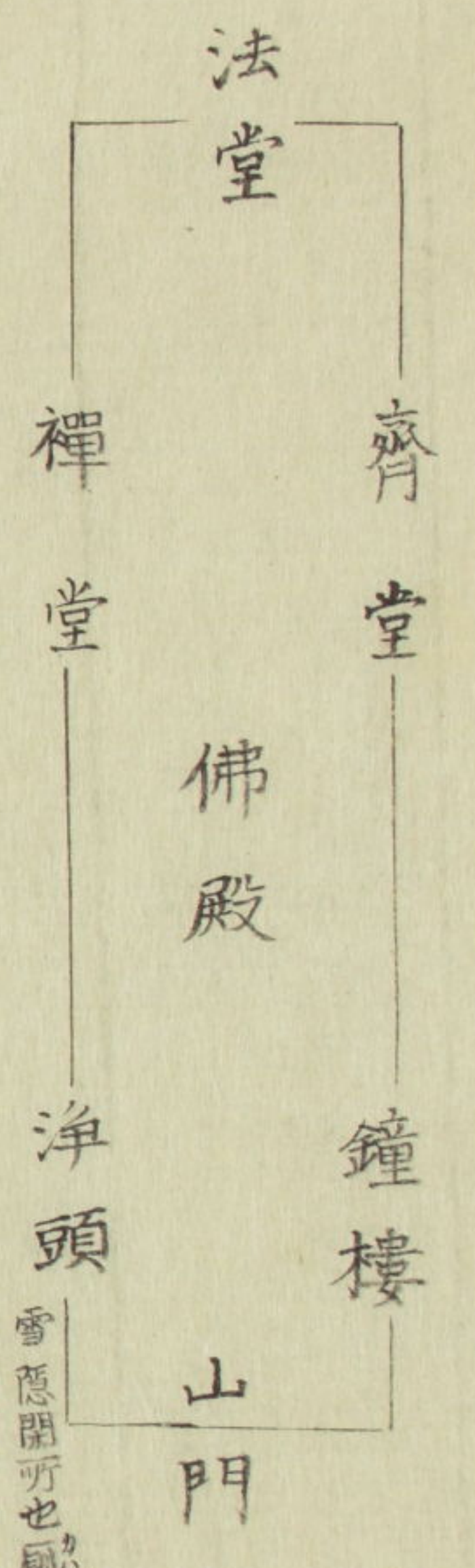
初冬、題、總寧寺絶境

禪林、纈、纈、佛、霜、紅

十一月總寧寺前景

臨岸薄氷還、死、靜

斷魂、落葉、滌、場、中



是之禪家七堂伽藍此堂後の萬福寺の捨之右之堂ハげを略しつゝ成り
 あり右之准しつゝ成す

又因府基と云ハ古戰場迹右銀堂中ちの境内此惣寺之
銀堂より東方に去所
 明神有祀を以て明神因
 小府中寺より至
 八幡園分寺ト申 則浦入に歌聲人之語の社有り此府是も舊時那ハハ此中の
 府亦右之社を福之府中惣鎮也此ハ之古田丸全吾源也又道灌鎌倉幕初
 將軍の臣
 概を築く後安房の武將望見義弘持つ小田原の小糸氏康是を攻免る
 此の古戰場之川流を流る後之所を見付て小田原の勢流を馳逐して流る
 ありちづと之依り此の社を築く事信之云成りしつゝ成り世々傳へ

北条入代紀見聞軍記あり見しつゝ但し小田原北条一代伊勢新九郎氏義二代
 小糸氏綱三代同氏康 是右の氏康之ハ人因ハ別不致
 予ハ之指して其功之ヲ將格トシ 四代同氏政 右銀堂寺ハ
 因並遷地ナリ 又代同氏
東照宮の内堀
 以て之立寄之云代 又別ハ古戰場と云有り初殿主基此跡と云有即ち此の白
 土全ナリ
 檀の木多し有り本堂より西ノ方之敷されハ入土此殿守基此上ハ小社有
是ハ幡宮之 又此の中ハ小糸大膳の指石此唐櫃有是々望見義弘の并公義弘ハ
 あり此ハ小糸大膳ハ之あり討死せしを葬りたる塚の由之也埋り有る
 一説ハ義弘ハ石櫃の中ニ魂を忍びしと云

又小糸大膳ハ我弘の家老之如次八幡代意馬もさしらね浪人なりと今
 傳ハ勤免後 東照君より御返し成義弘病中虚病系勤を
 あり
 此有入質と成りお及白米田勅方由と同く此府のゆゑに義弘没落の後も
 遠處之由致すも成をしつゝ没落の更ハ大坂より付天連金を代右
 傳ハ傳り用ひし之を大久保相模も此系
 増と云ふも誠を右は檀澤
 親討の事ふりしつゝ實永十一年の迄也義弘と小糸との軍ハ上より

前ふまの心本討死の右後人の心本の親又をうらん内膳ともを
又及はる民自のこくれまをうと 御當家此由類族とて保る
あれともゆひ乃斗ひうりて是流没落のうと

又丹波下郡の豊後刑部左馬房秀鏡の凍陸水中より雨の降らんとき
時ゆひ段とて云相をとり世鏡の舟橋を雲寺の如縁とて是民弘の討ひ
可持ありし由陸を流し不を今陸之剛とて刑部左馬房の陣陸とて之
後豊後刑部左馬房の武別豊後ふ叙有り世城取也

東照宮 御流の右江府の見ゆ事目のりまるとやとてこれよ
ま名城とてらん世付空地と成し由俗云傳へたりその後徳富もを
遷し一島境用とぬ又同水中より性有るる後舟に揺ふ揺りて人まを傳へ
のま力以奉し事有りそを介舟通りの畠中よりその摺お具なると堀也せ
し事有り又矢切村と云ふりて古き力の所瓦るの首以堀出たり事
有るも今粟心と云村まると由なり又山中とて巻おるおあの叫ひ

多きあく後波を勤ととて或の草摺鉄お馬れ音くりて之若智
織の示れもきりや今もその所居也

蒲生軍記巻四曰氏政氏直城ヲ避ク兵ヲ散メ秀吉ニ降ル氏政
弟北條陸奥守氏輝ヲシテ自殺セシム氏政時五十二歳北條新九
郎氏直高野山ニ赴カシム北條美濃守氏規城主同左衛太夫氏勝
等從ヘリ明年十一月氏直廿二歳ニシテ卒ス世人諺ニ曰秀吉潛ナサツ
鴈殺スト云フ毒害アリ高野山至川ノ水欬抑此北條ハ平ノ時政ヨリ相傳リテ高時ノ
代正慶二年三類滅ト時其親族勢州山田ニ逃ト隱レシ者アリ其
末孫伊勢ノ新九郎氏茂ガ朋友ニ荒木山中多目荒川在竹大
道寺ト云アリ共ニ武者修行ノ爲ニ關東ヘ赴キシカ此七人ノ内
若シ人ニテモ秀ル者アラハ残り六人ハ臣トナリ其ノ一人ヲ君トシテ
輔佐タラント互ニ契約タリシカ此新九郎其後三本杉ニ奉公シ其
主ヲ殺メ領地ヲ奪ヒ取り駿河ノ國主今川氏親ニ屬シテ謀トヲ

以テ豆州掘越ノ御所成就院殿ヲ滅シテ遂ニ其地ニ有テ葦山ニ在城
シ自早雲菴宗瑞ト號ス其後ニ扇ガ谷ノ家臣大森式部少輔ヲ襲
フテ夜討ニシ相州小田原ノ城ヲ技イテ又此ニ移リテ是ヨリ北條ト名乗
テ古河ノ公方政氏ヨリ氏ノ字ヲ賜フテ武威漸ク兩上杉ヲ壓シ氏康ノ時ニ至
テ大ニ管領ニ戰ヒ勝チ益々盛大ナリシガ此時ニ至テ氏茂ヨリ氏綱氏康氏政北條
左京大夫氏直五代ノ榮貴一時ニ滅亡ス我カラノ敵ナラザルコトヲ知テ始ヨリ隨順
シテ其家ヲ存スルカ大軍ヲ引請ケテハ能ク是ヲ守テ死ヲ致シ其義ヲ全フスル
カ此ニツテ過ズ然ニ始ニ敵ヲ侮テ兵法ノ理ニ昧ク後ニハ自弱ラシテ武將ノ節ヲ
棄テタリ此時マデハ東國ニ於テ北條ヨリ強キハナク國弥々廣ク兵益々多クシテ
未タ勝負ヲ決セスシテ降ル可_レ惜哉ト有リ己上

右々天正十八庚寅年七月の事又大将孫氏康此系圖を見ん小松内倉室靈
の末孫とあり

又越後軍記卷六ニ曰其比古河ノ御所晴氏ノ一族源ノ義明ヲ房州里見

義弘ヲ語ラヒ大勢ヲ催シ下総ノ國府ノ臺へ出張ス氏綱氏康ニ万餘騎ニテ
馳向ヒ合戦ニ打勝チケレハ義明ヲ討死シケリ義弘力不及ヒシテ引退ク
同十年氏綱卒去ス氏康相續シテ相模武藏ヲ領スト云云
古河ハ下野國ノ古河あり公方四代居クニ有り古河ノ公方四代ハ足利
成氏同政氏同高基同晴氏是なり喜連川ト此此先祖也

総寧寺鐘ノ銘并傳記詩文

題國府臺古戰場

嶂若_ニ屏風_ノ如_シ赤壁

甲_ノ兵埋卻_ト至今_ヲ談

森_ノ古戰場園裏

百_ノ仞丹崖臨碧潭

弘法寺

真_ノ寺_ノ境_ノ内_ノ林_ノ也_トて_レ林_ノ原_ノを_レり_トなり

海道_ノと_レ大_ノ松_ノの_レ並_ニ有_テ能_ク橋_ヲ門_ノ不_レト_シ遠_ク乃_チ幸_ニ能_ク橋_ヲと_レ少_シ橋_ノ是_レ乃_チ
お_レ中_ノの_レ橋_ヲより_レの_レ下_ノより_レを_レり_ト名_ノ雁_ノ基_ノ六_ノ十_ノ階_ノと_レ仁_ノと_レ門_ノあり_ト故_レ此_レなり_ト二十
番_ノ神_ノの_レ社_ノ有_テ此_レ仁_ノと_レ地_ノも_レなり_ト思_フ仁_ノと_レ毎_ニ年_ノ七月_ノ十六_日あ_リ高_ノ橋

近在寺前合寺相撲有屋ふ大木の楓樹何千るといふ瀾りとは中堂を
 厚芝蓋青也いふ葉又紅葉の時分夥しく見物如鄰より群集するも之
 真間山弘法寺と号しけいちえい言宗於發設ノ優波女塞の派たるも
 去る後弘法寺以同字異音漢多れちふく唱ふる由也閑は日頂
 聖人玄寂氏入道日常弟四ノ子祖師聖人の弟子云老僧乃其一人也此聖
 人宗瑞ふ倚ちけ寺を日蓮より取ルト云云撰待場有け之所より安殿庫
 裏へ遙くゆくたりの本堂より乾の方之左の南面の風流此亭と是又夏
 果此の時分その月見ある僧堂座禪之額ハ編覧亭といふも此府の
 東殿の近くつらゆる河海入の若像一目よりその長流洋々漾々として
 白布巾曳起百の高瀬舟風帆黄白を映く少となく書とす際もあはれ
 此岸のトトをを佳絶の風景相列種全縣乃編界一覽亭後醍醐天皇同
 令傳能見堂といふともいふをたうくはく口系地渾ては地古迹物渾り堆丘高
 墟山觀く少くも更ふ風光を合り替り替りたる喬木靈巨楓嵐梢を巨て

の類りよ於惘々夢ををる詩人文人比一 equal 風雅乃良料也

題編覧亭

萬項平蕪眼裏焚 數帆歸北水流南
 凡斯倚一亭終日 千日光陰一日酣

寄真間之楓木

磴一階六十攀躋處 凭檻捫蘿遠庭前

映日靈楓紅蜀錦 酒顏倍被綠樽邊

あらびたのき多分世ふゆのみち紫の紫秋とれ詠のたうく人

淡人あらす

真間山弘法寺鐘銘并序

凡伽藍資具者所以行法進道者也其員雖多善法作鐘為最
 誦經說法普集天衆晝夜告時聞發善芽降伏天魔俾三途苦
 佛家神器弘法要賤豈如之耶仍今抽丹精勸一門僧俗賴有

縁信者ヲ新治鑄此鐘以掛三密蓮祖靈前伏乞天下同歸妙法
乃至法界同證菩提而已

其銘曰

健權遠響音

聲到無邊

合識普聞

覺生死眠

告時集僧

開演妙玄

拔苦與樂

益覆大千

寛永十五龍輯戊寅李春如意珠日

當山第十一世嗣法禪智院日立誌之

江戸御鑄物師大工

長谷川越後守吉家

國分寺

附タリ元陣家跡并國分の城迹

寺領

弘法寺より七八町有鐘石乃畔鐘石以過く國分村に入る仁王の
向は茶師堂有なる又門を入本堂并庫裏より享保年中灰

小室より火ゆるく燃えす又其後建川是西宮氏皇帝此御願國
に建直給へる國分寺也國分山金光明寺最勝王經院と號し
遊行基菩薩乃用基則山作樂師如未辨用帳乃布の懸貴
佛靈寶出する古ハ七堂大伽藍之十今存之礎石苔むく有る
は舊伽藍迹と云く畑の綴り右の如き大礎石多く有るむ今此境
内は國府主倉吉田道權の代官職乃陣家此の地を以て殿殿の地今
ヤシタケ
岩田
國分入部といはれ城をたうりを捨き揚ヶ城とて是も慶長年中
東照若より城没却きと云く之を世所の沼池より近年薄草を
出さ

東鑑卷一治美四年九月十七日丙寅

不待廣常泰入令向

総國給千葉介常胤相具子息太郎胤正次郎師常

胤成武四郎胤信大類五郎胤道通作六郎大夫胤頼東嫡孫小太郎

成胤等ヲ奉會ス干下總國府ニ從軍及三百餘騎也ト云右武衛
奉り隨ヒ此時迄來ル壽永三年二月五日相馬次郎師常國府九郎胤
道東六郎胤賴兄弟三人父常胤共三河守範賴屬棋津國
谷城郭ヲ攻七日箭合ト定ト云云 同書卷三

治承四年十月二日辛巳 卷一 武衛相乘干常胤廣常等之舟楫濟
大井隅田兩河ヲ精兵及三萬餘騎赴武藏國豐嶋權守清光
葛西三郎清重等最前奉上下云

舟楫トアリ舟橋ヲ掛ルトハナシ太井ヲオホ井ト訓附ケ有レ庄下
井也國分迄漸ク三百餘騎を以テ舟橋以掛クニ及ル舟
楫ハ舟乃橋ニ通ルを以テ舟橋懸トシハ信後ト云也
廣道ニ万騎以テ運来シ隅田川と合ル又上流乃信小
常仲を討討トシテ舟楫を舟楫正討トシテ舟楫
舟楫以掛クたるとハ成爲キ歟

國分寺鐘ノ銘 但平朝臣北條時頼ノ奇附ノ鐘有リシヲ近年打碎ク之ヲ其故ヲ不知 靈佛靈寶物

鏡石

弘法寺の中より 弘法寺より 弘法寺より 弘法寺より
石版を鏡石面乃トク見申ルを名づく名を又一名要石とも云といり
是は田乃中河橋ゆりとも石の原を名づく又此石を生かして生かす
といふを河橋の事なりと云ふ又此の城の内を源氏乃大名ハ橋上城
を名わぬト也 是の居る石を又此の石橋を由府屋の石橋ニツト云
蓋といふ

繼橋 むしちち屋より板を以て中流りておし舟橋ト云ふなり

繼橋ノ銘

繼橋興廢惟文繼橋 歌林千歳萬葉不凋
鈴木長賴 勅之

景物 入江 川添うらぎ

真弓此秋枕字一記

あはれきとてゆらん路もわかろしはまうり池橋やるをりん
他見抄よりのもきんとは是れきとてゆらん馬のあはれを
りうととてはまうり池橋やるをりん

續後撰十一意歌

友原道經

信濃此浦るの波もうらむかたにを替り人れあひしきやあき

千載十八旋改新に源仲心や能全のゆふらうりるを任まそうあり
きりあふ源俊賴朝臣にけらるしき歌

東路の公室れあはれはるるも君のあを福を頼むるもあ
とて

在り

源俊賴朝臣

かみ路しきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ
あはれはるる

新勅撰十九類志

意 鎮 和尚

あはれしきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ

因集百首なるし時秋橋意

常 盤 井

あはれしきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ

續後撰遺十は意之御同心をよめ給り

土御門院御製

あはれしきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ

全八十三代在位十二年御出家御壽三十七寛喜三年卯十月十日崩御建久六乙卯御誕
九戊午三月三日御即位正治元己未御在位ナリ

因集建保二年内大臣家百首に名所の意

権中納言定家

あはれしきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ

續拾遺歌志

醍醐入道大臣女

あはれしきあはれしき橋あはれはるるも君のあを福を頼むるもあ

新後撰遺十は意新此中

後三位定子

うはくせきく清き斗を此整りてんはるる水も此浦に流る

千二百番歌合五月雨 冬巻 雅 經

續後拾遺恋四

贈後三位乃子

おもむかひの心はたれも光臨しといひてまゝ乃流る

風雅雜中

友系 朝村

高降れ共多此浦風吹くきまの流る申さくこのつぎ橋

蓮上人

管人を流しそと人と整へて橋よ家方よりよのまゝ乃流る

曾我 又而

東流をそと流るるまはあつてかや浦の流橋を流る

橋 石相

頓 阿上人

山人乃道のゆきこれ流も流る 教ふるるまのまゝ乃流る

作者 未詳

晴庵や浦のつぎはく来て見たを入ゆるか於日くし此屋

と流るれハ住き来れ人の流も流る 教ふるるまのまゝ乃流る

已上

橋よ意のまきく流るに流る

橋りし恨のまきつぎはくの中流る時をせげく思ふまゝ乃流る

おのりし浦を流る

かゝりし浦を流るる夕月日あとの流る夕まゝ乃流る

題 續 橋

板橋 有 古 銘

真 間 道 傍 碣

鳳 製 照 邊 區

公 詠 垂 玉 笏

曲 江 今 碧 田

野 渡 無 風 骨

憶 音 繼 橋 勝

故 人 唱 謔 發

白兎奈奈宮 真弓此地麻古松有本小社也
附寄和奇

生の間の入口鏡橋の傍らより右へ入口鏡橋のわきへ本右の方にもあり是古の
白兎奈奈明神と社之は以石牌より真間娘子今も白兎奈奈と云ふ又白兎奈奈と申
此法が細まう一名と云うは白兎女と書るる由かすも白兎奈奈と云ふ
も此を諸あるは白兎と云ふ名をたもつて一皮の字の尻押ひと削り
左あり板敷に初ふゆりてこと有是あつたの俗説と云ふ萬葉集の白兎奈
或ハ氏胡奈奈と云ふ 古来の人は白兎奈奈と云ふと其名を真弓と細と云ふと云ふ
今も此の地に白兎奈奈と云ふ

真弓此地奇枕写しなよ結す

萬葉集第三過勝鹿真間娘子墓時

山部宿禰赤人

いみしき人 あまきん人の 志のこころ 帯と結入て
ふきやま 妻といひし人 かたし まけてあはれ
おきつ こころいひし人 志のこころ 志と結入て

松の根や まきくろき ことのみ 名のこも我を

けしきも形くみ

返奇

万葉集第九詠勝鹿真間娘子歌一首并二短歌
可憐志望のまろ入御おたひく玉原わをうめん白兎奈奈 歌

高橋連蟲磨

鳥の啼く いつたればよ いみしき人 あまきん
今まろ 絶えすいひ わたし まの白兎奈
あまきん 妻とすいひ 志のこころ 志にをり
好友 わたさき く川をたよ もうそゆ
あまきん 中ふは いま いな
望月 これ まる あも 瑞 ま れ の 志 ま 磨 る

夏むしの 火入るる 羨望もよ 願あくる
 中世から 人のいふとま 敬けしむ けけらぬのを
 なるすとも 多ふた船あつて 波の幸の ことくまふ
 れたつあよ 姉妹あやせし 幸死さふ 阿まふとを
 きらあも 見きんがども おもほゆたふも

返予

膳座れまら井んねとまなすしあが海せんあゆめり
 法彌奥抄ふ是ハ初結玉結麻糸あす井水汲女なりそ能多
 みくそ女より子倍せり如月如花咲めくきそそんて人か
 疑うと母の世れおふとく歳ちくちくぬらふかあそそ投チケ渡
 云々
 其心を先海にかけしうれまら乃の思ふ事とあまの井の秋ふ
 なることあつるうけはぬあり

萬葉集第十四 十総国歌一首

作者 未詳

加津之可此生る乃と船ちりりうら海のおまの波もとらふ
 他世は抄まられたるいふとはお世しひ心のかんまこと云々
 日かまれば結麻わがはれすともそのあつたを戸たつそのあ
 法彌奥抄ふ是ハ初結玉結麻糸あす井水汲女なりそ能多
 りくそ女より子倍せり如月如花咲めくきそそんて人か
 疑うと母の世れおふとく歳ちくちくぬらふかあそそ投チケ渡
 云々
 其心を先海にかけしうれまら乃の思ふ事とあまの井の秋ふ
 なることあつるうけはぬあり

此水汲一井也其水又女也一其水出深淵川を見り人云此乃此
 乃女也其水汲りてあつらひらるる其水身を投げると有るまら
 分れりさりと後と有る井水その水一又今も思ふ事といふ月を信ふ者
 事多し其真間の関の聖人らるる此水も亦か飛雨の如くふるま
 ぶ廻りして見れば人々もわらわらと笑ひて思ふ事れ遠にても女
 何くともなくあはれらるる聖人の神もすこす有る難き事者なり何者
 其と何のふらぬはと云ふ思ひたりとある所解りふ罪なりと云
 聖人の水けりめちううに多きを脚中内務法へとせよき何聖人を
 是て何ぞとて尋ね求むとて思ふふ吊ひ得たりと云ひし一は女
 婿一りまかきと云ふ夫はとて思ふ事後尋ね求むとて思ふ事と云
 日そ若き婦の産むことと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
 於此女を建ふは吊ひし一程其の昔けりと我をば神も亦り思ふ事

いふ物にいふ事今も思ふ事神と云ふり此龍也夫よの思ふ事明神の事
 此を真間の関の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 又真間の関の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 分をたげたる死骸乃神は神と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 多しと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
 事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
 心は姉の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 故事に仲津島鴨は山に飛りて姉をたれ一世なりと云ふ事と云
 神龍をたれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 をたれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
 可事

鈴木院 附程本通に石塔

龜井の傍りの小庭を云はれ其修程建つて右号く之世居り云

まろ牙物収りて入に鑑橋井に思ふたふ款を條の載とある
死をともく教へは是を淨修覺をもて奥此のし御大之終末也
石塔有りむ終末修理造營凡世修理ハ北條の家信此由石塔乃
傳ふ記しるむむ少條の古教場とるる事とて建らるるなる
又寛文八年中年豫舎鶴ヶ岡修造の二箇ハ終末修理也云は修理
なるを新編鎌倉志鶴ヶ岡修造棟札載之

妙見菩薩 所曾谷友茶王公廟の記

小金海道昭立方曾谷村長谷山安國寺の寺中ニ之塔ハ旭ちと蓮葉
なりひそる像ハ當坐千葉寺此妙見井の末末と云は依りて千葉の妙見寺
系後一ても世々之ふ系ハ受五塔りてとりて建末ハ寺此妙見寺のハ堂ハ
都の大儒芝南郭子鳥石子より晋の王羲乃像を細史母表を建テ石牌
を建らる其外發文也をも収光らる是安國大居士乃ハ吾北の友なるなり
名之類の文字ハ晋王公廟あり鳥石子等石牌も同乎南郭子州の

たぐー鐘ノ銘寶物

王公神像記

朝散大夫滕康桓撰ス

王公神像一座者晋右大將軍會稽内史瑯琊王羲之字逸少神也
鳥石山人少好書容盡後世邈泗晋代以追二王跡乃凜然曰
吾惑日尚英猶神之於漸夫人平王氏而前無王氏王氏後無王
氏其迹延及我東方古人率由之職此之由乃於其宅中構一室
曰書聖閣安王公神像祭之其前置帖朝夕拜跪之餘寓目于此
心神與之一竟日忘食淡年一筆恍若自出者卒業之後自備
覽之踊躍曰神其眷吾乎不爾何得彷彿乃今以往觀神
其有所啓而可入者鬼神享于克誠其豈虛訓哉先是余
肇裡武鈴森者獨與都下我徒同之己古人已欲達而達
人豈不與同之乃命善工作神像者百頒諸大邑名都

其未^レ建^ニ新廟^ニ則^テ姑^ク配^ス附^ス之^ヲ皆^シ神^ノ祠^ニ蓋^シ同^ニ其^ノ好^ム也

烏石山人書^リ藏^ス于^テ下^ニ総^ニ別^ニ蘇^ノ射^ノ王^ノ公^ノ廟^ニ

時^ニ延^喜子^ノ改^メ元^ヲ夏^ノ四^ノ月^ノ也

又世所曾^レ谷^ノ及^リ三^ノ人^ノの陣^ノ家^ノ者^ニ一^ノを是^ト々^ト千葉^ノ介^ノ乃^チ一^ノ族^ノあり^ニ也

香^ニ樓^ニ

右^ニ亦^ニ之^ノ又^ニ久^ク保^ルと^シ云^フ材^ノあり^ニ真^ニ同^ニより^テ東^ノ壁^ノより^テ八^ノ幡^ノ町^ノより^テ右^ノ佐^ノ倉^ノ海^ノ道^ノ乃^チ横^ノ海^ノ道^ノ小^ノ金^ノ願^ノ丁^ノ乃^チ所^ノ以^テ府^ノ城^ノ故^ノ乃^チ海^ノを^テ望^ム之^ヲ有^ルは^シひ^ニや^ニ九^ノ良^ノハ^シ結^ス之^ヲの^ノ神^ノあり^ニ一^ノを^テ強^クん^ニた^ス名^ノあり^ニたり

明治二十年丁亥中冬

筆者

妻木頼徳



